今月のみことば　2016年10月

「しかし、主は、『わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである』と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。」（コリント人への手紙第二　12章9節）

苦難の神学

この世に生きる限り、苦難と無縁の人はいない。仏教の開祖、釈迦も人生の苦難を「四苦八苦」ということばに凝縮させている。

ところが、私たちは何とか苦難から逃れたいがために、宗教に救いを求め、将来の安心を買おうと、健康維持に励み、保険や資産運用に期待する。果たして、それで安心が訪れるものだろうか。

ルカの福音書12章においてキリストは、愚かな金持ちの譬え話を語られた。畑がかつてないほどの収穫をもたらし、笑いが止まらない。彼は穀物を一粒残らず自分のために蓄えようと食料庫蔵庫を増築した。ところが、その夜、彼の命は取りされた、というのである。たとえ、私たちが全世界を得ても、自分の命を損じたら何の得があるだろうか、とキリストは問う。

一方、クリスチャンはどうだろうか。キリストを信じたら、健康と繁栄が保証されるのだろうか。驚いたことにそうした教えを売り物にする教会には人が溢れている。神は、私たちが健康で経済的に豊かな生活を望んでおられる、と臆面もなく主張する牧師は大勢いる。

しかし、もしそうだとすると、キリストご自身が貧しさの極みを経験されたことを何と説明するのだろう。また迫害に遭ってきた何百、何千万というクリスチャンの存在をどう説明したらよいのだろう。

写真の女性、ジョニー・エレクソン・タダは、17歳のとき、浅瀬と知らずに海に飛び込み、首から下の自由を失った。クリスチャンであった彼女は、奇跡を祈ったが、今日まで癒されることはなく、慢性的な痛みと一切の身の回りを人に頼らなければならない不自由の中に今もいる。

ところが、何もできないように見える彼女を通して、数えきれないほどの人々が神に望みを見出した。つまり、いつかは衰えてなくなる一時的な健康やいのちを頼りとする生き方ではなく、たとえそれがなくなっても失われない確かな希望がジョニーにあることが人々にわかったからである。

事故から約50年が経ったが、彼女の働きは広がる一方である。著書35冊を世に出し、また世界中の何百万という、障がいをもった人々とその家族に希望の光をともしているばかりか、アメリカでは障がい者のための法律の改正にも多大な貢献をした。

苦難に遭わないことを誰でも望む。しかし、苦難に遭っても、神に望みをおいて絶望しない、というのは、信仰がなければできることではない。「苦難という牧羊犬に追いかけられて、私は神のもとに連れてこられた」とジョニーは言う。キリストにあって苦難とともに歩む、というのは、神の特別な召しがある証拠なのかもしれない。「苦難の神学」とは今秋から米国ダラス神学校で始まるジョニー担当の講座名である。